

農業農村工学会サマーセミナー2016 報告 Report of JSIDRE Summer Seminar 2016

○田中宣多¹・辰野宇大²・今出和成³・小杉重順⁴・
樋口慶亮⁵・宮井克弥⁶・崎川和起⁷

○TANAKA Yoshikazu, TATSUNO Takahiro, IMAIDE Kazunari, KOSUGI Shigeyori,
HIGUCHI Keisuke, MIYAI Katsuya and SAKIKAWA Kazuki

1. はじめに

サマーセミナーは、年に一度、農業農村工学会本大会が開催される際に、複数の大学から学生が集まり、農業農村工学に関わるいくつかのテーマに関する様々な議論や、お互いの研究活動についての情報交換を行う学生主体の企画である。

本企画は、1996年以降ほぼ毎年、継続的に実施されており、基本的な運営はすべて本学会の学生会員を中心とし自主的に行われる。17回目の開催であったサマーセミナー2016では、「農業、農業工学の現状・課題・将来についての意識の共有」をテーマとし議論した。本稿ではサマーセミナーの歴史およびサマーセミナー2016の活動を報告する。

2. サマーセミナーの歴史

中桐(2015)の報告によると、1992年に発足したスチューデント委員会のメンバーだった先生方や学会事務局の方々等の働きかけにより、他大学の学生同士の交流が活発化し、農業農村工学という同じ専門分野の学生同士が議論できる場への欲求が芽生えたため、サマーセミナーの開催に至ったという歴史がある。

近年、学生の就職先は多岐にわたり、大学で農業農村工学を専攻した学生が他分野・他業界へ進むケースも多くみられ、本分野における若手育成にとっては、重要な課題となりつつある。講演会が開かれる機会を利用して全国各地で農業農村工学を学ぶ学生が、あるテーマに関して議論し、交流を図ることは、学生同士のネットワークの構築や農業農村工学分野に対する理解を深めることに繋がり、当分野の活性化に貢献すると考えられる。また、昨年度のセミナーでは、参加者が農業農村工学分野に対して、何を思い、何を学び、何を指すのかについて、互いに理解を深めることができた会になったと感じている (Fig. 1)。



Fig. 1 グループディスカッションの様子

¹ 京都大学大学院農学研究科 Graduate School of Agriculture, Kyoto University.

² 東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agriculture and Life Science, The University of Tokyo.

³ 岡山大学大学院環境生命科学研究科 Graduate School of Environmental and Life Science, Okayama University.

⁴ 北海道大学大学院農学院 Graduate School of Agriculture, Hokkaido University.

⁵ 東京農工大学大学院連合農学研究科 United Graduate School of Agricultural Science, TUAT.

⁶ 内外エンジニアリング株式会社 Naigai Engineering Co., Ltd.

⁷ (株) 三祐コンサルタンツ Sanyu Consultants Inc.

キーワード：農業農村工学，広報，若手交流，サマーセミナー

3. 2016年の活動報告 セミナーではメインテーマを考えるにあたり、「農業農村工学」、「復興農学」、「大学生や大学院生の役割」の3つのサブテーマを設定した。テーマごとにグループに分かれて議論を行い、最後に各グループが参加者全体に対してグループ内で考えたことや他グループへの提案等を発表し再び全体で議論した。

3. 1. 農業農村工学 農業農村工学の研究分野では、農地を意識した研究が多く、現場と研究者が連携して、課題解決に取り組む場合がよくある。今回は、人とのつながりが重要である本分野において、学生に農業農村工学を知ってもらう機会であるサマーセミナーに若手をどのように集めるかに焦点をあて、グループ内で議論が進められた。結論として、サマーセミナーの質を向上させることや認知度を上げること、活動内容を広く認知してもらえるように、アウトプットの機会をつくることが重要であることが示され、具体的な方法についてもいくつかの提案がなされた。

3. 2. 復興農学 復興農学は農業分野における復興に関する学問である。東日本大震災から6年経過した現在、被災地の復興に関わる多くの研究や復興活動が行われている。グループ内では、本当の意味での復興とは何かを議論した。復興の有効性評価には住民、農業従事者、研究者、行政など多方面からの評価が必要であるため、一般論に留まらないように注意しながら、議論を進めた。今回、現地研修会において宮城県石巻の被災後の整備を受けた水田（以下、復興水田）を目にし、農地を震災前の状態に戻すのではなく、改良を加え震災前よりも向上させる必要があるという考えを持った。グループ内では、議論の対象を宮城県石巻の復興水田とし、復興の機能評価について話し合われた。結論として、農業農村工学を学ぶ学生として、全ての機能が震災前と比べて向上することを「理想の復興」とした。しかし、予算期限によるスピード性と水田の「食料生産」機能の復旧が重要視され、水田の多面的機能すべてを向上させることは、非常に難しい状況にある。我々がこうした問題に向き合うために、勉強会の開催等で学ぶ機会を継続して設ける必要がある。

3. 3. 大学生や大学院生の役割 まず、大学生や大学院生の役割とは何なのかを議論し、大学生には教育と学生生活の2つの役割があると考えた。教育としてはカリキュラムや研究室による強制力のある義務的な活動を通して本分野を知り、学ぶという役割がある。一方、学生生活には自由な興味に従って各々が視野を広げるといった役割があると考えられた。そして、大学生は教育・学生生活の摺合せを経て、社会に出ていくという構図が現状であるという共通認識が確認された。さらに、いかに農業農村工学分野に関わる人材を残すかについて、それぞれの経験や考えていること、自分たちに何ができるかを話し合った。その結論として、先輩が後輩に対して本分野を知る機会や意義を積極的にアピールすることが人材の確保につながると考えた。ただし、他分野への流出は必ずしも本分野にとってマイナスではなく、繋がりを活かして活発な情報交換ができればプラスの面も大きいのではないかという意見もあった。

4. サマーセミナーの感想 所属は異なっても同じく農業農村工学を学んでいる人たちと、真剣に議論できるという経験は私にとって非常に刺激的であった。今後も学生から社会人、研究者などの若手の交流の場となるよう、本企画を継続していきたい。

引用 中桐（2015）：学生自主企画サマーセミナーの歴史，H27年度農業農村工学会大会講演会要旨集 54-55.

謝辞 農業農村工学会事務局の方々，大阪府大中桐先生，宮城大学千葉先生，参加者の皆様には，サマーセミナー開催にあたりご協力頂いた。ここに深謝申し上げます。